

成田
歴史
玉手箱

畑のなかに眠る荒海貝塚



荒海貝塚

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。

稲作の可能性を秘めた、縄文最後の大型貝塚



貝がびっしりと堆積する貝層断面（西村正衛著「石器時代における利根川下流域の研究」より転載）

から平成2年までに5回の学術調査が行われました。

約150m四方の範囲に4カ所の貝塚が環状に配置され、貝層は

荒海貝塚は、根木名川と荒海川が合流する地点の標高32mの台地上に立地し、縄文時代後期～晩期(4,000～2,300年前)の遺跡として古くからその存在が知られていました。

近年、根木名川下流域では、荒海川表遺跡・宝田鳥羽貝塚・宝田八反目遺跡などの同時期の遺跡が確認され、中でも荒海貝塚は数少ない縄文晩期の大規模な貝塚として、早稲田大学や国立歴史民俗博物館により昭和35年

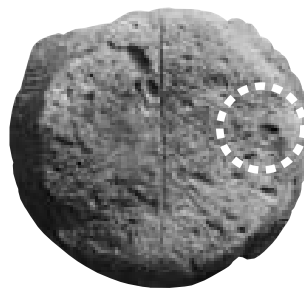
厚いところで1mにも達していることが確認されました。このうち最も大きい貝塚(約100×40m)から約2,500～2,300年前の縄文時代終末の土器が出土しました。この土器の特徴は、岩手県大船渡市の大洞貝塚の土器を基準とする大洞A式土器の影響を受けたこの地域独特のもので、「荒海式土器」と命名されました。このような遺跡を標式遺跡と呼び、荒海貝塚の名が全国に知られるようになりました。

出土した荒海式土器の底部から、荒海式土器が出土した貝層中からも稲のプラント・オパール(化石となった稲の細胞の一部)が検出されました。宝田鳥羽貝塚でも稲の化石が発見されています。この発見は縄文時代終末にはすでに成田で稲作が行われていた可能性を示すものです。しかしこの初痕や稲の化石が陸稲なのか水稲なのか、またどのような農具を使用していたかなどの問題は今後の調査を待たなければなりません。

荒海貝塚は、人々の暮らしが狩猟・漁労・採集を主とするものから、稲作を取り入れた暮らしへと変わっていったことを示す貴重な遺跡と考えられるのではないのでしょうか。



房総における縄文時代最後の土器「荒海式土器」(早稲田大学考古学研究室 提供)



荒海式土器の底部についた初痕(早稲田大学考古学研究室 提供)



編集後記

怪しい空模様の中、4月21日、「タケノコを楽しむ親子の会」の取材に。タケノコ掘りを通して親子のコミュニケーションが深まればと、成田青年会議所が企画。会場となった(仮称)野毛平里山自然公園には、約200人の親子が集合。途中から降り出した雨にもめげず、タケノコ掘りや竹馬遊びなど親子で楽しい

1日に。この竹林には、週末ともなると県外ナンバーをつけた車が出没するため、同会議所のメンバーが2日前の朝早くから警備に。大いに盛りあがった今回のイベント。参加した子どもたちも、タケノコのようにすくすくとまっすぐに成長してほしいものです。